

---

# 空からの処方箋

C\*2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空からの処方箋

### 【Nコード】

N8611L

### 【作者名】

C＊2

### 【あらすじ】

ななくさしき  
七草志紀 17歳。

痛いことが、大好きな、フツー(?)の男の子。  
そんな彼の前に現れた、自称「背後霊」。

彼女の登場で、志紀の平凡(?)な人生は、  
180度変わってしまう・・・かもしれない？

## プロローグ

「いたいよ」

「いたい」

「やめて」

だれか

「たすけて」

おねがい・・・

十

惨めだ。

すごく惨めだ。

痛い。痛いよ。

真っ暗な世界。終わりなんてないと思っていた。  
終わって欲しいと思った。

だけど、そうじゃなかった。

終わってはいけなかった。

気付いた時には、既に、後の祭り。

どんなに空を見上げても、決して、戻ってくることはない。

痛い。

痛いよ・・・。

十

待ってて。

助けに行くから。

貴方を助けに、きっと行くから。

そこで、待ってて。

いつも通りの一日が始まった。  
日直が恒例の挨拶をはじめ、

「起立！」

それに従う僕ら。

「礼！」

そんな日常をぶち壊したのは、  
1人の少女だ・・・え、少女？

「呼んだ？」

「う、う、うわぁ!？」

待って下さい。

僕の机の上に、なにやら美少女が立っています。

仁王立ちです。

正直、僕が座ったら、スカートの中が見え・・・っと、これは言わないほうが得ってヤツだ。

そんな美味しい状況に陥ってます。正直美味しすぎて美味しくない。

「七草、どうした？」

七草とは、僕のことである。

教室に響き渡る僕の突然の奇声により、僕に集中していた視線は、  
日直であり友人でもある真田の方へ向かう。

チクショウ。もっと見てくれて良かったのに。イケメンはこれだから。

「どうしたもこうしたも、それは僕の台詞だ」

「なんだ、いつもの発作か？」

「これは僕じゃなくても叫ぶ状況だろう！？」

「何いってんだ？ついに頭だけじゃなく、頭もおかしくなったか？」

「全部頭じゃねーか！って、だーかーらー」

ふわっ

そう、形容するならまさに「ふわっ」、そんな感じ。

夢にまで見たロングヘアーの美少女が、そんな形容詞を引き連れて、僕の視界から消えてしまった。

消えてしまった、ということは、つまり。

僕はただの、危ない人、ということになってしまっただけ。

「・・・だから、どうした？」

「・・・いなくなっちゃった」

「はあ？」

カツ、カツ、と廊下から足音が聞こえる。担任が来たようだ。

慌てて席に着こうとしたのだが（僕だけが、あの状況故に立ったままであった）少しばかり遅かったようだ。美人だが性格に難ありの我らが担任の登場である。

「・・・七草、何1人で立っているんだ。まあたいじめられたか？」

「それなら良いんですけど違います」

「そうか、残念だったな」

「ついさっきまで、僕の机に女子が立ってたんですよ」

「やっぱりいじめじゃないか」

「そうじゃなくて、知らない女子だったんです」

「ついに知らないヤツにまで、おまえがいじめられたがってることが広まったってことだろう。よかったな、マゾヒスト冥利に尽きるじゃないか」

「違うんですって、そうじゃなくて・・・」

「幽霊よ」

「そう、幽霊です！」

「・・・・・・はあ？」

・・・・・・はあ！？

幽霊？ いったい僕は何を口走っているんだ・・・！？

今耳元で聞こえた、この女の声は一体・・・僕の後ろの席は、体重がそろそろ100キロを超えそうなのが悩みの相撲部・山田君なのに！

「あ、っと、その、幽霊じゃなくて」

「幽霊よ」

「幽霊だそうです」

「よし、七草、ちょっと保健室に行こうか。な？」

強制的に教室を追い出されてしまった。なんだこれは。まるで僕が痛い人のようではないか。

ともかくにも、謎の女性の声の正体は分からぬまま、僕は保健室へ向かわなければ行けなくなった。

まあ、こんなラッキーな機会、逃すわけはなく、僕の足は部室へと向かって一直線だったのだ、が。

「まったく、要領が悪いわね」

と、そこで、また声が聞こえる。背後からだ。慌てて振り返る。体育2の僕には隙しかなかった。ちなみに10段階。

「残念、見えないわ」

「どういうこと？誰なんだ？」

「背後霊」

「はあっ！？・・・いごれい！？」

「そ。だから見えないわよ。」

そっか、霊じゃ見えないな。それなら仕方ない。

いやいやいや仕方ないだろう。っていうかさっきちょっと見えただろ。しかもあれ思いっきり前方だったじゃないか。

「最初のあれはサービスよ、サービス」

「何その微妙なサービス！どうせなら座ってるときに仁王立ちしようよ！？」

「・・・ヘンタイ・・・」

「だってその方が、蹴りが良いところに決まるじゃないか」

「蹴られる前提なのね」

「スカートめくりからのハイキックへのコンボは定石だろう？」



「なんのよ・・・」

「マゾヒスト界では常識中の常識、初心者から上級者まで、誰もが愛用するテクニクなのさ！」

「そんな世界があるなんて、初耳なのだけれど」

「世界はかくも広い。それなのに、周りを見ようとしないうる愚かな若者がどれだけ多いか」

「貴方も十分若いじゃないの」

「いやキミも若かったじゃないか」

「そうね、まだ138歳だから、若い方だけれど」

「138! ? なんかため口きいてすいません、ホント調子のもつてましたすいません、なんなら殴ってくださいすいません、いいくにつくろうすいません！」

「落ちていたら？ 貴方の独り言、廊下に響いてるわよ？」

怪訝な顔をした教師がこちらを見ていた。しかも3人。まるで遠近法。

「つていう夢をみたんだよな〜♪ん〜♪いいてんき〜♪」

「誤魔化すの下手ね・・・」

普通なら此処で、教師に怒られるのが物語の筋なんだろうけれど、僕のことを今更怒る教師なんてうちの担任くらいのものである。

「それにしても、貴方あんまり驚かないのね」

「何が？」

「背後霊、って聞いたたら、普通の人は疑うわよ」

「背後霊じゃないの？」

「そうだけど」

「じゃあいいじゃないか、ホントのことをいちいち疑ってもしょうがないし。そんなことより、僕はキミの名前が気になるよ」

「なずな、よ」

「ふうん。なーちゃんか」

「何、よ、それ」

「呼びやすいじゃん」

「・・・貴方、バカ？」

「そうですがなにか」

「・・・はあ」

ため息をつかれてしまったけれど、母親にも父親にも担任にも友人にも毎日ため息をつかれていた僕には、今度こそ隙はなかった。

「そんなわけで、私は貴方の背後霊・貴方を守るために派遣された、コードナンバー201002なずな。貴方を守るのが私の役目であり、私の課題でもあるわ。」

「ふうん」

「・・・もうちょっと興味を持って頂けないと、話が進まないのだけれど」

「うーん、守って貰うとか、どうでもいいからさ。それ、僕じゃなきゃダメなの？」

「貴方じゃなきゃダメなん。だって、貴方、ここら一体で一番、痛い目にあっているの。驚くほど強い数値が出ていたわ。」

「よくわからないけど、つまり、僕を守らないとなーちゃんは困るってこと？」

「まあ、そういうことね」

「うん、頑張ってるね。多分大変だよ？ついてないね」

「見ていれば分かるわ」

恐らくなーちゃんは、眉をしかめて困った顔をしているに違いない。そういうことにしておいた方が、僕のテンションがあがるから。ともかく、そんなわけで、僕には背後霊さんが憑いたらしい。これ

はますます、部室に行く必要があるそうだ。  
今の時間なら、きっと下里センパイさがりがいるだろう。

「授業はよくて？」

「うん、授業に出ると怒られないからさ」

「どうして貴方が、選ばれたのか、分かった気がしたわ」  
「どういうこと？」

「こっちの話よ。それでも私は、貴方を守らなくちゃいけないの。  
そうしなければ・・・」

なーちゃんの言葉は、そこで途切れた。  
言いたくなかったのか、言う必要がなかったのか、言うつもりがなかったのか。

それとも、部室の戸があいて、驚いたからか、

「あら、七草くん。今日は早いのね」

下里先輩の姿をみて、絶句したからか。

とにかく、なーちゃんは言葉を失い、下里先輩は不敵に笑い、僕は・  
・特にいつもと変わらず、部室へと足を踏み入れた。

## 1-2

下里センパイは、僕の1コ上のセンパイだ。見目麗しく、春になると1年男子を虜にし、夏になる前には現実を嘆く一年男子を量産することでも有名な、つまりは変人である。

「保健室にいけって言われちゃいました」

「まーた怪我したの？」

「いや、今回は濡れ衣ですよ。僕、別に黒板に頭ぶついたり、足を机に殴打したりとか、してないですもん」

「あら珍しい。」

センパイのほほえみは、そう、まさに天使！

天使のほほえみと言わなければなんと言おう！

笑いかけられてしまえば、真実を知っていたとしても、思わず高鳴る心！

「それで、どうして部室に来たの？サボり？」

「まあ、そうなんですけど・・まーちゃんセンパイを待とうと思っ  
て」

「つまりサボりね。あの子、夕方まで来ないじゃない」

「今日は水曜じゃないですか。きっと昼には来ると思います」

「ああ・・そうね」

どういうこと？と置いてけぼりを喰らっている背後霊さんのために説明しよう。

まーちゃんセンパイとは、僕のもう1人のセンパイで、究極の学校嫌いなのです。

遅刻常習犯、どころか、校門が閉まるぎりぎりまで学校へ来ないと

いう徹底っぷり。

そんなにキライならいつそ来なければいいのに、毎日必ず5分だけでも学校へ足を運ぶのは、

きつとセンパイにも思うことがあるのでしよう。

一方下里先輩は、真逆も真逆。学校へ一番ノリすることに命を賭けていると言っても過言ではなく、校門が空く時間の1時間前から学校の前で待機をするという徹底っぷりには頭が下がらずにはいられません。どうしてそんなに早く来るの？と下里先輩に尋ねたら、笑って言われました。「特に意味はない」と。

「さて、授業に出るかな」

「え、センパイ、授業行くんですか?!」

「別にいつもサボってるわけじゃないわよ」

「そうだったんだ・・・」

「失礼ね」

「失礼しました」

下里先輩は、効果音でいえば「ひらっ」と舞って、部室を出て行った。

残された僕は、ふう、と堅いソファに腰掛ける。

そして思い出す。そうだ、1人じゃないんだった!

「忘れてたの!?!」

「ごめん、僕忘れっぽいから」

「殴れてたら殴るところね」

「大歓迎」

「嘘よ、背後霊が主人を殴ったりしたら、鎖を切られてしまうわ」

「鎖?」

「そう。輪廻の鎖。私にすらも見えないけれど、私と天は鎖で繋がっていて、この鎖が切れた時は、私は死ぬわ」

「え、霊も死ぬの？ 霊なのに？」

「まあ、この世とはまた、違うのだけど」

「何度でも死ねるとか、何それ美味しい」

「死の瞬間なんて1度で十分よ、一度だっていらないわ！」

強い語調に驚いて、僕は箸を止めた。

「・・・ごめんなさい」

「・・・いいえ、私も悪かったわ。声をあげて。ところで朝ご飯・・・なの？」

「昼ご飯」

「まだ9時半よ!？」

「早弁ってやつだよ・・・うつ・・・ぐ」

「ど、どうしたの!？」

「唐辛子おにぎりは辛かった・・・」

「当たり前じゃない!!!!」

「その辛さが、痛さが、気持ちいい・・・」

「う・・・うつとりしないでよ、気持ち悪い」

「もっと言って!」

前途多難。そうつぶやいて、なーちゃんは黙ってしまった。疲れたのだろう。

僕も少し疲れたから、お弁当箱をしまつてソファで睡眠体勢に付く。きっとお昼にはまーちゃんセンパイが起こしてくれるだろう。

「そう、寝るなら、私は天へ一度戻るわね」

「いつてらっしゃ・・・って、え、戻れるの？」

「当たり前じゃない。貴方に付きつきりになっていたら、ほら、その・・・あ、貴方の着替えとか、どうするのよ。見てるわけに行かないじゃないっ」

「・・・別にいいけどね？」

「わ、わたしが良くないのよ!!」

声をあげて、それからぷつりと音がしなくなった。本当にどこか行ってしまったらしい。

それならお言葉に甘えて。

夢を見よう。楽しい楽しい夢を。

「おやすみ」

僕は浅い眠りに落ちた。

## 2-1

「おい。七ちゃん、起きろー。」

「んん・・・っ」

「七ちゃんってば」

「・・・！」

「おはよ。めっちゃめっちゃうなされてたけど、へーき？」

「覚えてないっす」

まどろみの中で揺れる世界。徐々に焦点が合ってくると、そこにはまーちゃんセンパイの笑顔があった。

「やほやほ。帰りたいー」

「今来たばかりじゃないですか」

「そんなことないよ。10分くらい七ちゃんの苦悩の表情を見ていたから」

「趣味悪っ！！」

「痛い、痛いって魘されてたから、てっきり悦んでるのかと思って」

「あー・・・それは、イイ夢だったかも」

「デシヨデシヨ」

まーちゃんセンパイは、常に笑顔の人だ。僕はまーちゃんセンパイの、喜怒哀楽の喜以外の表情を見たことがない。しかし、見た目とは裏腹に、センパイはDSである。僕の天使とも言えよう。

「下里は？」

「授業に行きました」

「で、なんで七ちゃんが居るのかね？」

「反抗期なもので」



「みっちゃん怒らなかった？」

「そのみっちゃんセンセイに追い出されたんすよ」

「ふむ」

そもそも、うちの担任が僕ごときに目くじらを立てて怒るわけがないのである。確かに僕は問題児だけれど、下里センパイとまーちゃんセンパイを前にすれば、僕なんて空気と呼ぶにもおこがましい。

何を隠そう、まーちゃんセンパイの出で立ちは、だぼだぼの学ランにツインリボン。それだけ聞けば、どこからどうみても危ない人だが、センパイは144センチの超小柄な女の子。恐らく、変である以上に、可愛さが先に立つため、意外と違和感はないのである。

違和感がないといっても、それは僕のような、周りが変人ばかりの特殊環境に置かれた人間だけに適用される話で、センパイの町中、学校、至る所における浮きっぷりは大変なものだ。本人がまったく気にせず笑っているのも、気にすることもばかかしいという境地に入るのは、僕を含めて片手で数えられる程度。きつとうちの学校の人間は、まーちゃんセンパイを見る度に心を痛めているのだろう。

ま、めったに来ないんだけどね。

「で、なんで追い出されたって？」

「センパイ、幽霊って信じます？」

「質問を質問で返すとは、七ちゃんも言うようになったじゃないか」

「いや、まずそこから話さないと、進まないんですよ」

「ふむ。信じるよ。七ちゃんがいうなら、居るんでしょ？」

「幽霊じゃなくて僕を信じるってことですか」

「そそ。ボク基本的に、七ちゃんや下里のいうことはなんでも信じてるよ。」

「それは光栄です。まあそんなわけで僕に背後霊がついたんですよ」

「背後霊がツイッター？そりゃビックリしたなう。」

「今ちよつとどっかいっちゃったんですけどね。とにかく背後霊がいるんです」

「七ちゃん、つつこんでよ、ボク悲しい」

「笑顔で言われても説得力ないですよ、センパイ」

「あはは」

ふいに「ふわっ」と気配が降りてきた。なーちゃんが戻ってきたのだろうか。

「センパイ、背後霊戻ってきましたよ」

「マジか！背後霊さんやほやほー！」

「えっ」

なーちゃんの、いろんな意味で驚いた声が背後から聞こえた。うむ、初やつめ。

「なーちゃん、これ、まーちゃんセンパイ」

「どもども、七ちゃんにはいつもお世話してます」

「逆っ！！」

「あり？ボクが世話される側だったの？」

「というか、ボクもセンパイも下里センパイに世話されてるんだと思います」

「それは言えてる」

なーちゃんは静かだった。僕とセンパイのやりとりをただ聞いているのか、それとも単に驚いて声が出ないのかはわからないが。

『どっちもよ』

頭に直接響く声。そうか、そんなこともできるのか。背後霊って便利だ。

『最初からやってたじゃない・・・』

そーだっけ？

『気付かずに独り言を言ってたけどね、貴方は』

お恥ずかしい。まあそんなわけで、なーちゃんの話センチパイにしていたところなんだ。

「何？もしかして今心の中で会話中とか、そんなノリ？」

「なぜばれたし」

「なんとなくセオリーにのっとってみただけだよ。うーん、実はボク、背後霊にはちょっとうるさいんだよね」

「初耳です」

「うん、昨日からだから」

「近っ！！」

「背後霊は、とにかく危険から守ってくれる存在で、読心術が得意なんだよ。」

「え、心の声に反応してくるのは、読心術だったのか」

『そうよ？』

「すげえ！！すげえ精度だ・・・」

『貴方わかりやすいもの』

「そんなさざりと言ってもダメでしょ！読心術で片付けちゃダメでしょ！超能力でしょこれ！」

『また独り言になってるわよ・・・』

はっ、と気付いてまーちゃんセンチパイを見ると、やっぱりニコニコ

笑って僕を見ていた。あらやだ恥ずかしい、興奮しちゃう。

「あとはまあ、背後霊が見えるのは憑かれてる人だけ、とか。守れなかったら消えてしまうとか。イロイロ。」

「ホントに詳しいじゃないですか」

「ググレ」

「ググ・・・？」

「七ちゃんはそろそろPCを覚えた方がいいと思うよ」

「じゃあこんど電源ボタンの位置から教えて下さい」

『それくらい私でも分かるわよ・・・』

「やべえ僕背後霊よりも機械音痴だ・・・」

「音痴マスターにかかれればそんなものだろう？方向音痴、機械音痴、恋愛音痴、普通に、音痴」

「うるさいうるさいうるさい！僕だって一応気にしてるんだぞ！」

「うんうん、嘘だね」

「嘘です」

『ノリについていけないわ・・・』

なーちゃん、それで、センパイの情報はどこまであってるの？

『だいたい全部よ』

じゃ、このままじゃなーちゃん消えちゃうじゃないか

『どうして守れない前提なのよっ』

だって僕、ドMだもん。守られちゃ、困るよ？

『ダメよ、このままじゃ貴方、死んじゃうもの。それに、守れなければ私も困るの』

ふうん。ま、せいぜい頑張ってみれば良いんじゃないかな。守られる気はさらさらないけど、ね。

僕は守られたりされるような人間じゃないんだ。  
僕は痛みを感じていなければいけない。  
もっと、もっとだ。

「七ちゃん、そろそろはじめよっか」

「え、下里センパイは？」

「いるわよ」

「うわぁ、いつのまにっ!？」

「七草くんがぼーっとしていただけじゃない」

「いやはやそうでしたか、すみません」

「ま、とにかく、はじめるよ」

『なにがはじまるの?』

部活動です。

「では、今週の部活動報告会を始めます。」

『・・・何部なの?』

「じゃあまず、下里から」

下里センパイがいつも通り報告を始める。  
何部？そっか、言っていなかったっけ。

僕の大切な部活動。

「正義の味方」部！

## 2-2

『せ・・・正義の味方、部・・・？』

なーちゃんの嬉しそうな声が僕の頭に響く。

『呆れてるのよ！どこをどう解釈したら今の私の声が嬉しそうに聞こえるの！？』

マゾ的には嬉しそうな声、でしたよ？

『・・・』

なーちゃんってば、本当のことを言われて照れてしまったようで、黙り込んでしまった。

まあ口を聞いてくれなくなった、という表現の方が適切かもしれな  
いが。

「それで、七草くん・・・聞いてた？」

「聞いてませんでした！！」

「仕方ないわね」

はあ、とため息をつく姿も麗しい。その顔を思いきりしかめて僕を罵ってくれないかなあ。

「先週の続きになるけれど、敵のアジトはやっぱり・・・梅桜駅付近で間違いないわ」

「ってことは、尾行成功したんですか！」

「途中まではね」

「途中？」

「途中で見失ったらしいのよ」

「ふむ・・・」

『・・・敵、いるの？』

いますよ？敵の1人や20人くらい。

『多いわよ！守らなきゃいけない私の身にもなりなさいよ！』

そんな一斉に襲ってくるわけじゃあるまいし・・・

『そうなの？よかった、1人ずつなら、負ける気がしないわ』

いや、3，4人ずつってところかな

『多いわよ！！』

「まあでも、そこまで分かれば上等じゃないですか。僕の出番も近いですね」

「そうだね、七ちゃんの活躍が期待されるね」

「任せて下さいよ！」

『以外・・・貴方にもちゃんと出来ることがあったのね』

なーちゃん、さりげなく失礼だと思います、ソレ。

僕だって・・・いや、僕にしか出来ない重大な、重要な役割があるんですよ！？

『そうなの？もしかして、意外と喧嘩が強いとか・・・少し見直した



わ  
』

「というわけで、七くんは今回も罔頑張ってくれたまえ」

『って罔!?!』

「了解です。」

『了解じゃないでしょっ!自分の置かれてる状況、分かってないわね!?!』

これが僕の日常なんだもん!

『可愛く言ったってダメ・・・はあ、もう好きにすればいいわ。』

やったあ!お許しがでたぞ!

晴れて僕は好きにすることにした。そうだ、さっそく今日の放課後  
乗り込もう。

僕のそんな心のつぶやきにも反応しないところをみると、なーちゃん  
はだんまりに徹することにしたらしい。賢明な判断だと僕は思う。  
なぜなら僕らの会話を突っ込み切れるのは、この世にただ1人しか  
いないから。

「それで、まーちゃんセンパイの方はどうなりました?」

「んー、そうだね、80%ってとこかな」

「上々ですね。これなら、近いうちに決行できそうだ」

「うん」

「じゃあ僕も、来週には報告出来るようにします」

下里センパイには下里センパイの、まーちゃんセンパイにはまーちゃんセンパイの役目があるように、僕には僕の役目がある。  
なーちゃんには悪いけど、これは僕じゃなければ出来ないことだから。

「じゃあボクはみっちゃんのとこに報告に行ってくるよ」

「私は授業へ行くわ」

「僕も、出るかなあ・・・」

ふぁーっと、大きく伸びをした。それはほんの数秒のことだったのに、下里センパイはあっという間に部室からいなくなっていた。

「じゃ、七ちゃん、頑張ってね」

「センパイこそ、出来るだけ早くお願いします」

「もっち、リョーカイなのだよ」

まーちゃんセンパイは、そう言うとき軽いステップを踏みながら、職員室の方へ向かった。あくまで職員室の「方」であり、職員室そのものには行かないらしいと、下里センパイから聞いたことがある。それもそうだろう。職員室にはまーちゃんセンパイの大嫌いな「先生」がいっぱいいるからね。もちろん僕だって好きではない。それでもまーちゃんセンパイが週に1度、水曜日だけお昼に学校へ来るのも、自ら校舎の方へ向かっていくのも、それが顧問との約束だからに他ならないのだろう。

「ふう、じゃ、僕も行きますか」

予鈴まで少し時間があつた。それなら先に、体育館を覗くのも悪くはない。

『どうして?』

急になーちゃんが声を出したので、僕は少し驚いてしまった。そんな半日やそこらで慣れる状況でもないらしい。願わくば慣れたくはないものだ。驚かされた時の、ビクツとした感じは、嫌いじゃないから。むしろ好き。いや積極的に驚かされたい。

『・・・変態。』

もっと言って!!

『・・・それで、教室へは行かないの? またサボるつもり?』

「違います。僕をそんなふまじめな人間みたいに言わないで!」

『あ、そうよね。ごめんなさい』

「え、そこで謝っちゃうの?! もっと言って欲しかったのに」

『話が進まないじゃない』

「うーん、なーちゃんは僕を理解するのが早いね」

流石は守護霊ってところなのか。いや守護霊は関係ないか。

『それで、何しに行くの?』

それは、行ってみてのお楽しみ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n86111/>

---

空からの処方箋

2010年10月16日00時36分発行